# 法政大学学術機関リポジトリ

## HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

# おぞましき愛の行方 : The Time of the Angels論

Yamamoto, Choichi / 山本, 長一

```
(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)
2
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
81
(終了ページ / End Page)
87
(発行年 / Year)
2002-03-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002873
```

# おぞましき愛の行方

### ——The Time of the Angels 論——

#### 山本長一

はじめに

Iris Murdochの第10作目の小説 The Time of the Angels は、The UnicornやThe Bellと並んでゴシック的な小説である。また、The Flight from the Enchanterにも似て、カリスマ的主人公が強力な磁場を形成することは彼女の初期から中期にかけての執筆段階の著しい特徴を示しているうえでも注目すべき作品である。

主人公Carel Fisherは、「黒い祭司」となって 神をも恐れぬ言動により〈限界状況〉の中で周 囲の人間を暴力的・性的に呪縛している。 Murdochは、この小説で従来のテーマである濃 密な限界状況が臨界に達し、核分裂を起こし、 やがて崩壊へというプロセスを愛の幻滅のパタ ーンを中心に描いている。その枢軸をなす Carel と彼をめぐる何人かの男女との闘争のてんまつ がこの作品のストーリーである。この限界状況 が収束するためには巧妙なる「王の死」が不可 欠であろう。儀礼的な供犠がどのように成され るのであろうか。その過程での他の作中人物た ちの愛の下部構造はいかなる幻滅に変化生成す るのか。それは〈他なるもの〉を、また〈欲望〉 とリエゾンすることを倦むことなく論じ続けよ うとする渦巻状のエクリチュールになる危険を 冒すことになるのかもしれない。

#### 1. 天使たちの場所

Murdochの小説の中には、ゴシック・ロマンの "loci" が似つかわしいものが多い。この作品の舞台はロンドンの都心に近く、大戦の爪痕が残り、訪れる人とてない霧に閉ざされた牧師館である。このように外部から遮断された館は、都会にありながら The Unicorn での中世そのものの隔絶した館を平行移動したセッティングとなっている。例によって、濃密な人間関係の網の

目により液状化現象寸前で崩壊間近の天使たち の聖なる場所が、ソドムとゴモラの町に堕落し つつある。ここは地下鉄の騒音が絶えることな く地獄の様相を呈していて、Carelの弟のMurcus やその友人のNorah Shadox-Brownや兄弟たち のかつての恋人だったAnthea Barlowといった 外部の訪問をはねつけて内部に入れようとしな いで、堕天使たちの跋扈する過剰なエネルギー のフォルスの場になりつつあることに気付かさ れる。非理性的なフォルスはCarelに体現されて 周囲を汚染してゆく馴致不可能なマグマであっ て、常に地層の薄い部分を突き破ろうとするデ ィオニュソス的不連続性を有する。備給されえ ないエクセは消尽されることでしか解消されな い。Poeの「アッシャー家の崩壊」での沼に映 ずる館を目の前にしたときの主人公が感じた恐 怖にも似て、Murcusは「近親相姦」と「父殺し」 のオイディプス神話にルーツをたどる〈根源的 暴力〉の臭いをかぎとるであろう。地下鉄・霧・ 蜘蛛、廃墟といった道具立ては恐怖を語るカタ ログとして充分と言える。

Murcus Fisher は弟Julianの週児である Elizabethの安否を気づかって牧師館を訪ねるが、「兄に対する、さらに古い恐怖心がいりまじった」感覚はPoeの主人公と同様のものである。Murcusは恐怖にとらえられながらも、兄が深い海から出て来たリヴァイアサンのような化物に変身しているのではないか、気が狂っているのではないかと、また Elizabethを「眠り姫」か「つれなき手弱女」と見なし、義父の Carel による囚われの身からの救出を目論んで牧師館に侵入しようとする神話・伝説的筋立てをこの小説は採用している。

#### 2. Carel をめぐる人物群

黒い祭司たるCarelは英国国教会の聖職者であるのに、誰とも会おうとせず隠遁者となり、奇行が目立つようになってきた。主人と肉の交わりをもつ黒人の血をひくアイルランド人メイドで「黒い女神」、「反処女」のPattie O'Driscollには、Carelが信仰を失いつつあるように思われ、こう感じていた。

It was in this closeness that Pattie apprehended at last something like a great fear in Carel, a fear which afflicted her with terror and with a kind of nausea. It seemed to her now that, for all his curious solitary gaiety, she had always seen him as a soul in hell. (Murdoch, 32)

彼女は「神を信じるように、彼の信仰を信じてきた」のであるが、「黒い法衣を着た主人の、暗黒の塔のような背の高い、影の深い姿を見上げた」(Murdoch, 34)。彼女はCarelの黒い情婦となり、そのためにCarelの妻Claraは死に追い込まれていたので、Carelの娘Murielとは敵対関係にあった。Murielの視点からは、父が「あの北欧伝説の岩屋に住む巨人のトロール王」であり、「家中の誰もがCarelをいくらか怖れていた」(Murdoch, 35)。このようにしてCarelは彼女にはたえず不安と恐怖を覚えさせる存在としてある。

CarelとMurcusの若死にした弟Julianの娘であったElizabethは、Carelに引きとられて育てられた。だが、Murcusは彼女を少女のころ見かけてから何年も月日がたち、今は19歳の美しい娘になっていることだろうと会ってみたくなるが、拒絶され会えないでいる。Elizabethは相て館の部屋に閉じこもり、ジグソーパズルとシガーにあけくれ、Carelからはギリシャ、ラテン語を学んでいた。Murielにとって五歳年下の彼女は、「無邪気の極みで、優美な家庭の中心であり、奇妙に侵しがたく、清らかな明るさ」をもち、利発で可愛らしく、従順な成長した妹であった。Carelが「自分の周囲にせっせとつくり出

す暗い訪れる人とてない洞窟然たる環境でElizabethはそこに灯る唯一の光明」(Murdoch,41)であり、隔離された生活の中でMurielは自分が一時的な生を生きていると感じ、「単純で罪のないもの、盲目的な愛、気兼ねなしの幸福な笑い、通りをうろついている犬たち」(ibid.)といった外部のごく日常的で平凡な生活に憧れていた。王妃然と寝そべっているElizabethの装計しているコルセットを見ることはMurielには不されていなかった。Elizabethは自らを「鉄の乙女」とも言っている。見てはいけないものを見るという〈禁忌〉を犯すことが、やがてこの小説のプロットの転換点になり、臨界に達することに注目しておこう。

やがて、Elizabethの部屋の隣りの小部屋の隙間からフランス鏡を使えば覗き見することができると分かる。こういったことからもThe Unicornの舞台 Gaze Castle を彷彿させる gaze と attentionのテーマがこの作品でも顕在化している。The Unicornでは囚われのヒロインHannahがアル中になり、部屋中あちこちに鏡があり、それを覗き込んだり、また近くのRiders Castle から救出を試みようと望遠鏡で覗く男がいるのとアナロジーをなしている。

Unsmiling Muriel still gazed into the mirror as into a magical archway in whose glossy depths one might see suddenly shimmering into form the apparition of a supernatural princess. (Murdoch, 45)

Deborah Johnsonはこういった鏡の部屋やタペストリーなどが、TennysonのThe Lady of Shallot と類似点が多いと、またRubin Rovinovitzはイゾルデをそこに見ている。宮廷風恋愛での魅力的なプリンセスの救出、奪取する騎士、"princess lointaine"の主題が散見される。

Murielの視点からは、義妹のElizabethは囚われたものとして見られるが、Muriel自身もこのままでは囚われの身であることを、つまり「シャーロット姫」になっていることを自覚してゆく。彼女はそこからの脱出を考え始めるのであるが、成功するためには「突然の変化の光をあ

てる衝撃」を漠然と夢見るようになる。牧師館 の門番に身を眨しているロシアの亡命貴族 Eugene Peshkovとその息子のLeoの存在が、彼 女をして外界に目を向かわしめる役目を果たし ている。他者への関心・注意(attention)が enslaveされた状態からの脱出の契機になるとい う、Murdochのドラマトゥルギーの一つである。 このことはMurdoch研究において指摘されてい て、Simone WeilやKantの "Achtung" が考え られよう。ただし、この場合はThe Unicornや The Italian Girl, The Bell のように外部の他者の 侵入によるというよりも、境界上の人物群Muriel, Eugene, Leo, Pattieなどむしろ体制内の人物ない しはその周辺の人物に期待がかけられていて、 外部のMurcusやBarlow夫人、Norahなどは決定 的役割を果たしていない。MurielはLeoをけしか けて騎士の役をさせようと目論む。この館で外 界とのつながりがあるのはLeoぐらいである。 PattieもCarelの情婦の身から脱するためには、 Eugeneに好意をいだくことでCarelへの視線を 転換しようとする。〈主人対奴隷〉の闘争という 下剋上の蠢動となる。MurielもEugene に同じ想 いを託そうとする。

Muriel stood at the bottom of the stairs. The house had huddled itself again about the scarcely audible music. She wanted air and motion, running, flight, anything rather than this stillness. She could not think about Carel or about the strange bond which he had seemed to make between them. The existence of her father weighed on her bodily, oppressing her like matter not like thought. She felt loaded and brought to her knees by Carel. If this burden could only slip off her, if some merciful gravity could only release her from it. But the dark image descending had already brought into view its illuminated counterpart. Eugene. (Murdoch, 133-34)

#### 3. 超人Carel

主人公Carelは、信仰を失いながら黒い疑惑の 教区牧師として牧師館に君臨し、姪(自らの実 子と分かる)のElizabethや女中のPattieと性的関係をもっている。いわば悪徳の栄えなる〈アナテマ〉の体現者として存在している。他方、学校長として外部のノーマルな世界に住むMurcusは、「神なき世界における道徳」という仮題で道徳の非神話化を企てる哲学的著作にとりかかっている。

Carelは聖職にありながら神を信ぜずにサタン を崇め、「現代は知的な人間が神を信じることの できない時代だ。……神が不在なら誰も恐れる こともない」(Murdoch, 79) と弟にうそぶいて いる。 Murcus 自身は、善の理念が行為におい ては実現が困難なのを考えつつ、兄への恐怖と 姪の Elizabeth に危険が迫っていることに暗い気 持になる。Carelの言説は、現代においては人間 の存在の無意味性、思想面での存在の忘却と故 郷喪失を生み、ニヒリズムに移行していること の証左であり、ハイデガーの言う「大地の上に、 大地を取り巻いて、世界の暗黒化が生起してい るとわれわれは言った。それの本質的な出来事 とは、神々の逃亡、大地の破壊、人間の集団化、 凡備の優先である」(ハイデガー、『形而上学入 門」、理想社、62頁)ことに対応している。最高 の理性の神の不在により、関節のはずれた無意 味な混沌の世界を出来し、理性は権利に、啓蒙 は野蛮に堕し共犯関係を構成、ファシズム、ス ターリニズム、似非グローバリズム、テロリズ ムと反テロリズムというふうに果てしなき暴力 の連鎖という原初の時代に逆戻りしてしまった。 単に「文明の衝突」では語りえない根源的なル サンチマンが潜在しているのではないのか。「理 性の腐蝕」は極端な神秘主義やロマン主義の反 動を喚起する。Caretの言う「知的な人間」とは 神なき時代の無秩序な現代人一般を指している のであろう。Carelはそれに対し神話化を図ろう とするのであろうか。この神話化というMurdoch が従来からもっているメタフィクションと巧妙 な構造的結婚を彼が企図しているのである。理 性は神話化に抵抗しながらも、その魅力を振り 払うことがきわめて困難である。原初的神話の 世界は支配・搾取・権力を帯び、〈暴力〉を胰胎 しつつ常に時代と歴史の底流にリゾームとなっ て潜んでいる。

Carelは牧師館にあって、ルシファーとして絶 対的暴力と権力を有している。Murdochが「ハ イデガーは、サタン自身に他ならない | と言っ ているように、Carelのハイデガーへの傾倒ぶり はこの小説の中にSein und Zeitが出て来て、 Pattie が Carel の読みさしを見つけて読み、不安 にかられることからも分かる。Rabinovitzは、 Carelがドイツ実存主義の暗黒の側にとらわれて いて、Carel自らが説いている自負・奴隷・近親 相姦・自殺といったものを実行に移していると 言っている。ハイデガーがニーチェの伝統を継 承し、〈善〉という概念に基づく倫理体系に大き な脅威となるので、作者 Murdoch はハイデガー に対立した考えをもっていると言うのである。 また、Murcusも執筆中の「神なき世界における 道徳」では、道徳の非神話化を狙い、善なき道 徳に危惧を抱いている上に実存主義にも加担し ないということになっていて、Carelとは対立す る立場である。Norahもアングリカンの主教に 対し、英国国教会として常軌を逸した人物に権 力を与えておくのは非常に危険であり、当の Carelは狂気じみていてしかも邪悪な男であるか ら手を打つべきだと迫るが、主教は寛容にみえ て、はぐらかしてしまう。NorahもMurcusも神 を信じないが、道徳については関心が深い。 Murcusは「もしも人間の生活の真実が恐ろしい ものであったら? 考えてみるだけでも破滅を招 くような、ぞっとするようなものだったら?」と **警鐘を鳴らすのに対して、主教は「そこに信仰** が入ってくるのです」(Murdoch, 94)と答える。 神への純粋な信仰心を絶対とする教会や聖職者 に寛大なのは低教会派にも似ていて、主教は積 極的にCarelにアナテマを宣することもなく、す ぐに破門しようともしない。

Carelについては、上記のMurdochの言葉をもじれば「Carelはサタン自身に他ならない」のである。ニーチェが「悦ばしい知識」の中で「神は死んだ、われわれはみな神の殺害者なのだ」と言い、神への贖罪の儀式について「われわれが自ら神々にならなければならないのではなかろうか?」と言うのは、Carelの先の言葉「神が不在なら僧侶はいっそう必要になる。ミサの間は私が神なのだ」と重なり合う。サタンとして

の Carel は自ら神になってその魔力を発揮しようとする。この作品のタイトルである「天使たちの時」はサタンが堕天使であることから、ハイデガーの Sein und Zeit と angels を連想させるのである。

#### 4. 暴力のミメーシス

この小説の時計以前にCarel, Murcus, Julianの 三兄弟間にAnthea Barlowをめぐっての闘争があり、Julianは死に、この闘争はElizabethをめぐっての闘争として二人の兄弟に残されていて、過去に相互暴力が存在したということに注目すべきである。カラマーゾフの兄弟にも似たこの兄弟間の闘争はJulianの死を招き、やがて小説の結末での最高の暴力であるCarelの死によって〈アブジェクシオン(おぞましい状況)〉の終焉となる筋立てをとっている。

一方、亡命ロシア貴族で、強制収容所での過 酷な体験をもつ、いわば集団的暴力の犠牲者で ある Engene の最も大切にしていたイコンには、 三人の天使が描かれていて聖なる三位一体を表 している。この聖なる天使たちの時と、牧師館 の俗なる天使たちの時は、コントラストと言う べきか合わせ鏡のシミュラークルとなっている。 そして、それぞれ閉ざされた世界と外の世界と の差異を際立たせている。神なき無秩序の俗な る牧師館での堕天使たちの跳梁と、ロシア正教 の聖なる失われた世界の異人との対照の妙は天 使が本来具有する両義性を語っている。この象 徴的なイコンは、Leoによって盗まれ売られてし まう。やがてMurcusにより買い戻されるが、こ の一時的な父なる神の神隠しはこの地での儀礼 の危機を暗示してはいまいか。さらにCarelと実 の娘である Elizabeth との近親相姦の場を Muriel が目撃する事態は、アジア的ディオニュソスの オルギアへと加速することの予兆である。

Carelは「最高善である神の死が恐るべき天使たちを解放した、そしてこの天使たちは人間を餌食にする存在だ、善も不可能だし、われわれは道徳よりも運命に支配されていて、われわれにとって唯一の現実はわれわれが帰ってゆく不気味な存在の子宮だけだ」(Murdoch, chap. 17)とMurcusに言う。エホバやリヴァイアサンの世

界においては人間は無益な存在で、大衆化と畜 群道徳のこの世界は無意味だとも言う。ニーチ ェの運命・悲劇の世界に通底していて、Murcus の属する善や道徳の存在する世界とは相容れな いものであり、さらに彼は兄に「あなたは狂っ ている」と言うと、Carelに暴力をもって牧師館 から排除されてしまう。Carelは、「虚無を祭壇 に置き、虚無のために神を犠牲にする」(『善悪 の彼岸」) という「最後の残忍であるこの逆説的 秘儀」を自ら実践しようとするのである。理性 の伝統を是とするMurcusと、「力への意志」を 崇めるCarel は水と油の関係でしかないことが明 らかである。Carelは生とは搾取であり、支配で あるということから、欺瞞的な理想主義や神の 世界に与しない。自らが育った西欧市民社会の 価値感を呪うことは自分自身を葬ることにもな ろう。自己同一性すら抹殺して、いっさいが永 遠回帰するのであろうか。これはニーチェの思 想の根幹である。人は生まれ変わるのではない。 とすると、現状で幸福でないものは未来でも幸 福ではないことになる。死しても永遠に労苦は 繰り返されるのであろう。人は永遠に旧廬に戻 ってくるのか。「何せうぞ くすんで 一期は夢 よ ただ狂へ」(「閑吟集」) である。Carelは狂 人であり、分裂者でもあるだろうが、このこと はわれわれ現代に生きる者を根源から揺す振り 続けてやまない。

フロムによれば、「生を破壊するには唯一の特性一力の使用が必要なだけだ」ということになる。他者や自分の生を破壊して生を超越することができると言うのである。CarelはPattieやElizabethに対し、また間接的にMuriel, Eugene, Murcusに権力を振う。過去においてJulianに対してもそうであった。Carelは自ら神になろうとするが、なり得るわけがないし、動物にもなり得ない。ただ「悪」の化身になるのである。フロムによれば「悪」とは、特別に〈人間的〉現象であると同時に悲劇的である。CarelはMurcusに「悪のみが現実だ」と言う。

Pattieは「生半可なことでは愛などとは呼べないような恐ろしい絆によってCarelと結ばれていて、彼女はCarelであった」(Murdoch, 153)。またMurielも「父は彼女自身の一部になりきって

いる」と言って、Elizabeth 同様 Carel にマイン ドコントロールされ、ミメーシスに汚染され、 伝染してゆく。しかも父と娘の近親相姦の場を 目撃するという「見てはいけない、知ってはい けない」タブーを犯してしまったのである。 Pattie も Muriel も自由を求めて生のベクトルを Eugeneに向けてゆこうとする。MurielはElizabeth を連れて牧師館を脱しようと Carel に宣言 するが、彼はMurielだけを追い出そうとする。 Carelの実の娘だと分かった Elizabeth の悪のミ メーシス、共犯関係に Muriel はがく然とする。 Murcus が買い戻して Carel の元へ返した Eugene のイコンをめぐって、Murielと Pattie は恋の鞘 当てをし合い、暴力を振い合う。こういった暴 力のミメーシスは、Murielを犯そうとするLeo にも伝染するほどである。

#### 5. 愛の契機

こういったアブジェクトとしての Carel は恐ろ しくも魅力的な、いわばメドゥーサの両義性を 有していて、周囲の集団の秩序を脅かす存在で あるがゆえに抑圧・排除される運命にある。宗 教は神話時代から連綿として宗教儀礼によって 〈汚れ〉を〈穢れ〉へとサクレしてきた。集団の 崩壊と解放、そのために Carel の死は儀礼的にも 必要とされる。また Pattie は Elizabeth に幼児の ころから愛情を覚えていたが、Carelとのインセ ストのことには耐えられないという手紙を書き 置きし、それを読んだ Carel は睡眠薬自殺を図 る。この行為はソクラテスが毒をあおいで自殺 したのに似ている。既存の価値・秩序への根源 的批判者、かつまた伝統により排除される犠牲 者がこういった〈パルマコン〉的存在者である。 すなわち、マージナル・マンとしてCarelのよう なカリスマ性を有するものも含まれるのである。 睡眠薬というパルマコンは魅惑と死の両義性を もち、それをあおることでCarelは自らの生命を 断ち、呪われた者として永遠回帰の連続へと変 身する。

この小説には、Carel を中心とするおぞましい 状況(アブジェクシオン)の中にも、バタイユ の言うように他の人物たちが自覚に向かう契機 がある。19章でMurcus が兄に殴られた一撃、つ

まり暴力が兄への愛を啓発するものとなったか らである。Murdochの小説では、ある現象が契 機となり、愛の認識や幻滅が突然に自覚される ことがよく見られる。暴力のミメーシスが、ア ドルノの言う人間と人間、人間と自分自身とが 宥和するミメーシスへと昇華されたのである。 相手への合一、同化という愛の救済である。〈力 への意志〉による相手を支配せんがための認識 でない認識、暴力による超越でなく愛による超 越を人は維持する能力を有しているのであろう。 人は本来孤独である。ひとりで生まれて、ひと りで死ぬ。不連続の個体が、たとえつかの間で あるとしても、愛によって自らの存在の無意味 性を埋め、自ら投企によって欠落した半分(相 手)を求めようとする。たとえそれがシジフォ スの甲斐なき労苦であろうとも。

#### 結びにかえて

Murielが、恐怖の対象であったCarelの自殺 を止めることができなかったのは、おぞましい 愛を実践する父から解放されたいからであろう か。彼女は初めてCarelの死か生かへの決定権を 握ったのである。最高の暴力である死を選択し てやることに父の〈力への意志〉を認めようと した。ここには神もキリストも存在せず、投げ 出された全くの裸形の孤独な即自存在としてあ るだけである。ルシファーとして地獄に堕ちる 父を死なせたのちに、自ら父を愛していること を自覚することになる。Murielの場合も父の死 という契機によって愛の存在を認識することに なる。さらに彼女は、「素朴な愛や、とらわれな い幸福な笑い、街の中を歩いている犬、そうい った単純で無垢な世界からの永久の訣別を宣告 されてしまった」という「閉じ込められた愛」 であったと自覚するほど成長を遂げたことにな る。Murielは暴力の汚染を食い止めるべく〈父 殺し〉の罪を犯しつつも、Carelを見殺しにする という第三項の排除を執行したのである。王は 殺されなければならない。集団の〈汚れ〉を一 身に背負って。

かつてCarelに呪縛されていた人物たちも次々と主なき牧師館を去ってゆく。「カラマーゾフの 兄弟」のMurcus は、兄の死によって未完の哲学 論文「神なき世界における道徳」もCarelの「黒い哲学」には対抗できないと知り、兄の〈力への意志〉も情熱も、Murcus自身の反省も最高の暴力の死を前にしては無力であることを知る。シジフォスの終りなき労苦を知りながらも孤独な群衆は、つかの間の合一によって慰められるべき〈愛〉というアモルフォスな現象のコミュニケーションを企図し、バタイユの言う〈呪われた部分〉をgazeすることにより、個々の人間が共生できる可能性を示錯することでこの小説は終っている。

#### 〈注〉

1. Iris Murdoch, *The Time of the Angels* (Harmondsworth: Penguin Books, 1968). ただし初版は (London: Chatto & Windus, 1966). 以下、引用は (Murdoch) と略す。

#### 〈参考文献〉

- 1. Gerstenberger, Donna. *Iris Murdoch*. New Jersey: Associated U. Press, 1975.
- 2. Johnson, Deborah. *Iris Mudroch*. Brighton: The Harvester Press, 1987.
- Rabinovitz, Rubin. *Iris Murdoch*. New York
   London: Columbia U. Press, 1968.
- 4. Todd, Richard. *Iris Murdoch*. London & New York: Methuen, 1984.
- 5. シモーヌ・ヴェイユ「ヴェーユの哲学講義」 (渡辺一民・川村孝則訳、筑摩鸖房、1996年)
- ジョルジュ・バタイユ「エロティシズム」 (渋澤龍彦訳、二見書房、1973年)
- 7. ———、『呪われた部分』(生田耕作訳、 二見書房、1973年)
- 8. エマニュエル・レヴィナス 「暴力と聖性――レヴィナスは語る」 (内田樹訳、国文社、1991年)
- 9. ルネ·ジラール 『暴力と聖なるもの』 (古田幸 男訳、法政大学出版局、1982年)
- 10. エーリッヒ・フロム『愛するということ』 (鈴木晶訳、紀伊国屋書店、1991年)
- 11. ———、「悪について」(鈴木重吉訳、紀 伊国屋沓店、1965年)
- 12. 今村仁司「暴力のオントロギー」(勁草書

房、1982年)

- 13. ——、「排除の構造」(青土社、1985年)
- 14. 山崎庸佑『ニーチェ』(講談社学術文庫、1996年)
- 15. J.デリダ他『ニーチェは、今日?』(筑摩樹 房、2002年)
- 16. F.ニーチェ [ニーチェ全集] (筑摩書房)
- 17. M.ハイデッガー 『存在と時間上・下』 (細 谷貞雄訳、筑摩書房、1994年)
- 18. 三島憲一 「ニーチェ」(岩波新書、1987年)